

書評…池上達也『経済学と外部』弓立社、一九七八年)

一九七九年一月

小幡道昭

『経済学と外部』という表題はそれ自体として象徴的、喚起的な刺戟に満ちている。それは資本主義社会を歴史的に特殊な一社会として位置付けながら、しかもその歴史性を理論的に説明することを課題とするマルクス経済学に独自の方法を髣髴させるからである。マルクス経済学はその中核に資本主義経済の自立性に照応するような、有機的統一性を具えた抽象的、一般的な理論を確立してゆくと同時に、他方それを基準として現実の資本主義社会の諸局面のうちに、こうした理論に相反するような諸現象の存在を浮彫りにし、こうして抽象的な理論とその外部の現実との間に一種の緊張関係を生みだし、両者の連関をたえず問題としてゆくような構造を具えている。しかもこの理論と現実との間に横たわる溝は、実証的な自然科学の場合にみられるように、理論的推論と事実による検証、演繹と帰納といった単純な上向下向の往復運動の繰り返しの中に徐々に埋められてゆき、その結果認識の精緻化と対象領域の拡張が達成されてゆくといった相対的、消極的な性格のものではない。それは基準としての理論によって判別された、それ自身で積極的な意味を有している溝である。むしろそのためにはまず、抽象的な理論がそれ自体で完結したひとつの体系

として確立されていなくてはならない。こうした有機的な諸関係で構成される理論的認識体系のもつ特質は、『資本論』の展開のうちにある程度見出すことができるのであるが、さらにその背後に『資本論』の方法とヘーゲル弁証法の近似性(二五六頁)を探り出すことも許されよう。池上氏は本書の第一部「序説Ⅰ—ヘーゲルと方法」で、『大論理学』における「始源」の問題に焦点を絞りつつ、この特質を「進行」が同時に「逆行」を意味する「回帰」の運動(一四頁)、「完全に自立した体系」がもつ円環性(四三頁)のうちに指摘する。しかも、こうした「ヘーゲル観念論がひとつの抽象であり、虚構であり(哲学)」という限定のうちにある(二二九頁)ことを、フォイエルバッハのヘーゲル批判を踏まえながら提示し、そこからおよそ次のような結論を導き出す。すなわち、「有機的統一」に対する「概念の体系」としての哲学が『物自体』を悪しき抽象として拒むとしても、語ることはそのことは現実存在そのもののある逆立としてしか成立しえない。それが『自己を疎外するとともにこの疎外と一つになったもの』だとしても、この疎外そのものは語られたものの対極に、哲学そのものの対極に、まさしく現実そのものとしてとどまっている(四五頁)というのであ

る。いわば語られるものと語るものとの間に繰り広げられる「言語の虚構」(同上)、理論とその外部に実存する現実との対向性を、池上氏はここで人間の体系的な認識方法に宿るいわば業の如きものとして訴えていると読むこともできよう。

けれども本書の意義は、単にこうした方法一般の考察にあるのではない。むしろそれを、本書第二部「経済学原理論の方法」宇野経済学への批判」というかたちで特殊化した点にこそ本質的な意義があるといえよう。これに対して第三部「経済学と外部」は、いわばその個別化に比定されるのであり、このうちに宇野原論を包摂したかたちで池上氏の方法が覽花されていともいえよう。だから本書はそれ自体またヘーゲル的な体系性で閉じられているとも読めるのであり、とすれば池上氏が本書は書かれたものそれ自体の次元で評価されるべきだと考え、この完結した書物の外部に属する著者の経歴委細を韜晦した(本書折込みの『風信』十一号参照)のも、また宜なるかなと思われるのである。そして氏が『試行』一九号(一九六八年)に本書第一部の論稿を発表して以来、十余年に渡り宇野理論を批判しつつ営々として歩んできた包摂の道程を辿り返してみると、その一貫した姿勢に畏敬の念を禁じえない。本書の魅力はこの点に基因しているといえよう。

しかしここで池上氏の響に倣つていえば、氏の包摂の過程が閉じられるまさにそのときに、宇野『原論』はその包摂を脱し、いわば「池上氏の経済学」の外部に溢出する面がありはしないか。むしろこのこと自体は、読むという行為、解釈するという過程一般に付き纏う宿命のようなものであり、したがってそれ自体がただちに氏の方法に対する批判となるわけではない。問題はただ、こうした氏の包摂から超出する断面にこそ、宇野『原論』の本領が潜んでいるように思われるという所にある。そこでこの第二部に立入って検討を加えてゆくことにしよう。

ここでも再び西施捧心、問題はまさしくその「始源」にある。池上氏は第一章「経済学の方法」において、「宇野のように考えるならば、原理論の解明すべき経済法則とは、このようにして(――資本主義の歴史的な発展のうちに傾向として――評者補)実現されるはずの『純粋の資本主義社会』のそれということになり、この経済法則を展開する主体はこの『純粋の資本主義社会』となり、それゆえ原理論の主体は『純粋の資本主義社会』だということになろう」(六六・七頁)と極め付ける。たしかに宇野の「純粋の資本主義社会」の想定には、それが恰も「歴史的にも実現されうる実体的なもの」(六八頁)であり、それを予め「理論的展開の前提」(六七頁)とすることで「論理的なものを歴史的なもので根拠づけよう」と(六三頁)しているかのような印象を与えかねない点で問題が残るが、しかしそれ「」を池上氏のように受取めて批判することは妥当であろうか。むしろ宇野の『経済原論』(一九五〇・二年、岩波書店)の「序論」に即していえば、その想定は原論の展開を通して理論的に「再構成」(宇野『経済学方法論』一九六二年、東京大学出版会、二七頁参照)されるべき到達目標に相当するのであり、この目標に対していかなる方法が要請されるかはその「『経済学の方法』のうちに、改めて別個の視点から明らかにされてい」と推察される。そう整理してこそ、帝国主義段階において「純粋化の傾向が阻害される」点を強調し、そこに資本主義社会の原理的把握と歴史的発展段階の分析とを峻別することの必要を説いて止まなかつた宇野の本意に叶うといえよう。

とすれば宇野の純粋資本主義の方法も、むしろ池上氏が第二章で論及している流通論に即して、とりわけ「冒頭商品の意味」のうちに出されるべきである。事実宇野はさきの「序論」の「『経済学の方法』で『経済学批判序説』におけるマルクスの上向下向法を引合に出し、そこではまだ「最も単純なる概念」が商品

となるべき根拠が十分に明確にされているとはいえないとこれを批判し、その根拠を下向による抽象化が保持しなければならぬ「上向の動力」あるいは「復元力」（『経済学セミナー』(2)「価値論の問題点」一九六三年、法政大学出版局、一〇一―一二頁参照）の問題に求めている。すなわち、商品からさらに財貨にまで下向してしまえば、そこではもはや他人との競争的な交換の必然性が喪失され、いわば「間の関係」（『資本論五〇年（下）』一九七三年、法政大学出版局、七四七頁）が抜けてしまうために、商品流通の純粋な構造を再形成してゆく「復元力」が見出しえなくなるといって、商品以下への下向を目標に似合わない過度の抽象として理論的に切っている。しかがってこのことはまた、冒頭の商品が資本家的商品でなければならぬ理由とも相通じる。すなわち、資本家的商品ではその背後の生産もやはり商品流通の原理によって処理されているために、非商品流通的な要因を捨象しうる根拠をそれ自身の内部にもつており、その結果そこでは他人のための使用価値と、その対偶をなす全面的な同質性としての価値という二要因の対立が最も純粋な姿で現われるという点が指摘され、こうしてそこに下向を商品まで切ったことと相通じるような理論上の展開動力が凝縮されていると考えられているわけである。純粋資本主義の方法とはまさしくこの切る論理のうちにこそ結晶しているといえよう。それゆえ池上氏がこの点を等閑に付したまま「宇野が冒頭商品を抽象的流通形態において設定したことが正当だとしても、……それは『純粋の資本主義社会』を前提することで可能になるといいえているだけであり、しかもこの『純粋の資本主義社会』そのものもまた、歴史的傾向を根拠として想定されたにすぎないものである」（七七頁）と論断しているのはやはり承服しかねるのがある。

氏はこれにかえて冒頭商品を「資本主義諸関係の溶解体」（九七

頁）として独自に設定し、この「『資本一般』たる商品」（一〇四頁）を出発点に据え、その特殊化された存在としての貨幣を媒介として、「個別性にある資本」（一〇四頁）を割り出してゆくという流通論を提示している。けれどもこの展開は、宇野の「復元力」に比定しようのような、いかなる動力に支えられているのか、いまひとつ判然としない。そのためにまた池上氏の場合、宇野が私的な競争関係のみを動力にして商品流通の構造を純粋に再構成し、それを商品―貨幣―資本によって構築された完結したひとつのシステムとして確定することにより、この流通論からつぎの生産論への展開は「論理的には飛躍する」（『価値論の問題点』二二頁）、ないしは「ロジカルには一つの断絶がある」（『資本論五〇年（下）』八一―八頁）というかたちで、流通論の最後でもやはりその最初に対応する切る論理を示している点が見失われてしまっている。宇野『原論』では、「資本の一般的定式」を通して資本が「産業資本的形式」をもとりうる形態であるとおさえられたことにより、結局、冒頭商品に前提されていた性格がその自己展開を通してこの「形式」のうちに措定されうるといって関係で、いいかえれば「商品によって商品を生産する」という回路で流通論が個別性の論理としてはひとまず閉じられることが示唆されていると読める。しかもそのうえでこの円環構造が真に閉じられるためには、流通論の論理だけでは処理しきれない労働力という特殊な商品が前提となることを指摘する（『資本論五〇年（下）』七三七―四頁参照）。こうして宇野原論には、流通論の小円環が閉じる所に生産論の小円環の始点が新たに与えられるという、いわば切つてつなげる切れ字的構造が潜んでいるといえよう。そこには「それ自身に利子を生むものとしての資本」によって、商品に始まる展開を労働者の個人的な生活過程のうちに再形成されるという点で、いわば単純商品的な特殊性を有しているのではあるが、しかし資本

主義経済のもとではその生活過程も資本の運動と無関係であるとはいえない。生産論の展開のうちに社会的生産と個人的生活との相互規制の関係が前提措置によって閉じられて示される以上、池上氏のように労働力商品を単に「外的な形式」(一一六頁)「外的な抽象」(二二六頁)とみなすだけではすまされないことになろう。

氏はさらに、この生産論における資本は、資本家と労働者の一般的な対立関係を基礎とすることで、「一般的価値増殖を実現しうる」(二二八頁)「社会的総資本」であるにすぎないとみる見地から、この資本は「みずからの抽象性を揚棄し、真の個性に到達しなければならぬ」(二三〇頁)と論じ、つづく第四章「資本主義的生産の総過程」に移行する。したがってこの章では、まず「社会的総資本における利潤串が、個々の生産部門をなす資本部分に一般的に付与され」(二三三頁)、「個別資本の価値増殖は外的にあたえられている」(二三四頁)という側面から利潤率の均等化も説明される。そして「資本が真の個性を獲得するには、その外的規制たる生産過程を脱し、それ自身に自己増殖するものという形姿を完成させなければならない」(同上)と述べて、結局それは株式資本によって達成されるとし、「展開の円環性はここに完成される」(二六〇頁)と論定している。これに対比した場合、宇野原論はその円環性を基本的には流通論自身の内部に胚胎されたものとしながら、ただその円環資本の商品化で閉じるという単純な大円環とは区別される独自の小円環が別出できるのである。これに対して池上氏は、流通論の展開が直接に「資本主義諸関係の総体を開示する」(二〇四 五頁)とみなすことで、宇野の「資本形式」論に潜む個別と総体の特殊な結節構造を原論全体の大円環のうちに解消してしまっているように思われるのである。

この結果池上氏はつづく第三章「資本の生産過程」に移ると、「資本はそれ——労働力——評者補)をただ商品のように扱いうるだ

けであり、またそうしうるところに資本の転倒的、疎外的性格があるとはいえず、この労働力については資本の生産物ではないことによつて、その商品化という抽象を超出している」(一一八頁)と論じるに到る。このために氏は「労働力の価値は労働力商品の価格としてのみ実現されるとしても、その一般的水準そのものは労働者の生活として資本にとつて前提されている」(一七三頁)という側面をとくに強調するのである。けれどもこの点においても、宇野の生産論の展開がその「価値形成＝増殖過程」でひとまず外的に前提された労賃水準を所与のものとして受取めるかたちで「価値法則の必然的基礎」を明らかにすると同時に、他方それに規制されつつ推進される「資本の蓄積過程」のうちに資本主義に特有な「人口法則」が樹立されることを明確にし、こうして前提された労賃水準が逆に資本の運動によつて措定される側面をも示すことで「価値法則の絶対的基礎」を確立していたことが想起されなくてはならない。たしかに労働力は商品流通とは別個の原理にもとづいて営まれが労働力の商品化という一点で閉じきつておらず、その商品化が資本による社会的生産の編成を通してはじめて確保されることを生産論で明確にする構成をとっていた。そして、ただそこではこの編成の過程がひとまず前提されていたことをうけて、つづく分配論は、剰余価値の私的競争による分配を媒介として商品流通の原理だけにもとづいてその編成が達成されてゆく過程を、極端な行過ぎを不可欠な要因とする動態的調整とそのため諸機構の面定を通して叙述する理論領域として定立されていたといえよう。いわば分配論は、流通論の円環と生産論の円環とを重合させてゆく過程で、その重合平面上に聳立する動態化の機構を純粹に抽出し、それを通して逆に現実の資本主義経済の内部に混在している、純粹に商品流通の原理のみで成立しているとはいいがたい諸要因を理論的に篩い出してゆく判別基準としての意義を有す

ることになる。こうして、純粹資本主義の方法がその端緒に胚胎していた切る論理こそ、原論自身の展開を通してやがて段階論の確立を要請する内的契機をなしていたと考えられるのである（宇野『経済学方法論』二七頁参照）。池上氏が第五章「結論」で、原理論の本質とそれと段階論との関連を問題にする場合、それが現実の資本主義経済の理解にどのように資するのかがいまひとつ明瞭でないのも、もとはといえばこの切る論理を包摂しえなかつたことによるのではあるまいか。これを包摂してこそ、「経済学と外部」の意義も真に生きてくると思われるのである。

つづいて「付論Ⅹ」で池上氏は自身の原理論の構成により近いと思われる「鈴木陽一郎の『内面的模写』」を取上げて、ただしそれが氏とは逆に「『個別性』から『一般性』への展開」（一九〇頁）をとっている点を中心に批判を加えている。また「付論Ⅸ」では『資本論』の方法」を形成史的に論評し、マルクスが当初の「ヘーゲルのトリアーデの放棄」を余儀なくさせられた原因を「『商品』を『資本一般』として措定することの困難」（二四七頁）に見出している。氏はこの「困難」を解決したことで、「『資本論』をヘーゲルの高みにおいて展開」（二四九頁）したことになるのであろうか。この「高み」にたつて、本書の第三部「経済学と外部」は展開される。ここで池上氏が物神性論を円環をなす体系内部の問題とし

てではなく、それと外部との特殊な関係とみなして論究している点は評価されよう。また、人間を「言語と労働」を媒介として自然に対して働きかける「意識的実体」として把握している点（二七九・八三頁）も興味深い。この第三部は、池上氏が引照付言しているブランシヨの「昼」と「夜」の問題（二六五―七頁）やバタイユの「普遍経済学」（二六九 七三頁）なども含め、「労働力の商品化」を単に御題目として唱えるのではなく、さらにその内容を研鑽してゆこうとするときに、そのための手掛りを与えてくれるであろう。

本書で池上氏が提示された、諸関係の完結的体系とその外部という問題装置は、とりわけ経済学の方法としての内容をめぐって、評者とその理解のしかたを異にしているように思われる。しかし問題は単に『資本論』なり宇野『原論』なりに対する解釈に止まるものではあるまい。現実認識の方法として、その有効性をめぐり、今後さらに検討が進められてよいように思われるのである。本書は叙述の面では必ずしも平明であるとはいえないが、宇野『原論』を挿んで氏に対局願ひ、一手長考を巡らしてゆけば、原論の構図と経済学の方法に就き自得必定の好著なりといえよう。

（東京大学大学院博士課程）